

# 自蹊庵便り

野点記念特集号

令和五年 葉月

NO 163

茶事折々 野点篇

遊びをせんとや生まれけん

過日、六月四日、京都は鞍馬の麓、白龍園にて、一日野点にて遊ばせて頂きました。

二日前までは台風の矛先を危ぶみながらも、当日は見事なまでに申し分なき晴れ渡る空の許での一席、一席にございました。

仕事の性質上、色々な流派の方々がおられ、なんと八流派ほども御縁を頂いておりました。

この度の舞台となった白龍園はまことに風光明媚にて何処を切り取っても一服の絵になる美しさをたたえ、先人達の残してくれた東屋が五つほど点在しております。

それぞれに趣のある大小の東屋を各流派各々その場にあつた趣向での持て成しは誠

に微に入り細に入り、この上なく心篤き一席一席にございました。

二方面からの溪流に囲まれて滔々と流れる水音、台風後の勢いもあつてか、渡りくるほど良い風に乗って、水しぶきの飛沫が青楓の一葉一葉を潤し、後半に至っては西陽に照らされてきらきらと輝き、今日一日の尊き流れのフィナーレを白龍園全山が祝福してくれ、皆々の労を優しく包容してくれておりました。

ざっくりと感想を述べるには余りにももったいなく、一席一席辿ってみたく存じませぬ。

アプローチにおいては、先ずは、口すすぎ、清めすすぎも兼ねての名水点、青竹の柄杓に青竹の汲み出し、青竹の香りと共に甘露な水の一服のお出迎え。

唇に当ててみれば、青竹の切り口が丁寧に施されていることも分かりました。

百人のお客様を想定しておりますので、どのお席も対応力のいることにごさいます。今日一日のために遠方から馳せ参じてくれた仲間達の笑顔の御馳走をも相まって心奥落涙のここにございました。

表千家のお席では、清流沿いの見事な借景の許、一寸に届かない細い青竹に水羊羹を流し入れ、中に螢を忍ばせると一口の趣向の持て成しぶり、床の御軸は亀萬歳の岩、私が鶴なので対句の上の句だけを瑞峯院昌道御老師に、この度のために書いて頂いたよし。この三年のコロナ禍ですっかり体力を落とされた中での依頼、よくぞ実現できたものだ。涙なしには拝めませ

んでした。

裏千家のお席に足を運べば、東屋の中でも一番広いところを選んでいたので、どのような室礼と趣向であろうかと興味深く思っておりましたが、なんとということでしょう。

見事な鏡点前の趣向(比翼点…編集子注)

にて、舞台正面上の柱に翁の面を飾り、能

をテーマにした道具立て、茶道口には五色

の垂れ幕、風炉釜二つを、ハの字に、客席

に向かい合つての男女二人での息もピツタ

リの鏡点前という趣向、殿方は陽なので、

陰の右に座し、女性は陰ゆえに陽の左に座

してのお点前、女性のYさんは、今日この

一日のためだけに上海より駆けつけての応

援、お点前一つも難解であろうに見事に美

しくこなされ、出されたお菓子も太陽と月

を村雨地で作り、皆々見事としか言いよう

のないお席にございました。

一席終えた後には、その舞台にて柳本先

生により朗々とした謡曲と共に舞われた仕

舞の余興にも感動の落涙一入にて、滔々と流れる川音とのハーモニーに鳥肌が立つ思いにございました。

武者小路のお席は、少し小高いところに

席を設けており、道具を始め、水運びなど

も大変であったことでしょう。でも、どの

お席も皆さんが楽しいお顔をして輝いてお

られました。

私が布志名焼の緑釉と黄釉の美しさに魅

せられ、出雲大社近くの美術館に幾度とな

く足を運んでいることを知っておられる亭

主が、面白く割れた布志名焼の火鉢を風炉

に見立て、広島瀬戸内育ちの私に因んで

宮島釜を懸けてくださった心憎いまでの手

法、出されたお菓子が真珠見立て、私の誕

生日の六月に因み、誕生石を主菓子に仕立

てるなど、誠に誠に皆様の技量共々造形の

深さに頭こっぺを垂れるばかりでございます。

大きな鮑の菓子器に真珠の主菓子と濡れた

黒文字の添えてある美しさと言ったら例え

ようもなき世界にございました。鮑の殻一

つもあのように美しく細工を施せる匠とはどのようなお人の手によるものでございましょう。

真珠のお菓子は私共が無農薬の抹茶でお

世話になっている吉祥園のお兄さんがミホ

ミュージアムの菓子職人としておられ、そ

の方の作品であつたよし、誠に美味にて

当日参加ならずとも、このように陰ながら

の応援、御支援の数々を賜つての贅をつく

しきつた一日であつたことに美しい苔の上

にも涙落つることしばしばでした。

江戸千家にあつては、毎月九州より御参

加いただいている花の精であるかのような

お二人が亭主と半東を務めながらの花遊び

の趣向、花屏風にそよぐ花々の可憐さと見

事なまでの竹籠の数々、一日花の命の装い

の世界を堪能させていただきました。お菓

子も市販ながら意味深く、一つ一つ心の込

もった手製の菓子入れに納まり、百個もこ

れらの細やかな作業をし、重い花屏風を運

ぶ等々、皆さんの働きにことごとく脱帽に

ございます。

五つしか庵がなく、人数も少ないために三斎流と藪内流は合同席となりましたが、小さな川床に近いお席ながら、楽しい工夫いっぱいのお席にございました。

茶碗一つ洗うにも、不自由であろうと思

われる限られたスペースの中で、湯を絶やすことなくお持て成しください、軸をかけるような場所もないなかで、短冊かけの上には鶴を、下に亀を、これまたこの日のために出雲の三斎流の方のお手製、藁で編んでくださったよし。おかれた条件の中で最大限に心を尽くすお持て成しの原点がここにも生きておりました。鶴と亀、後々まで

でも大切に飾らせていただきます。

屋根のある庵を一巡して下に降りてみますと、天候に誘われて、もう一席。なんと女医さんでもあられるYさんが御多忙の中、台湾茶の席を設けてくださっております。

説明も素晴らしく一煎二煎三煎と時の

うつろいに呼応するかの如く、誠に心の込もった趣向に感動しきり、しみじみ旨し茶にございました。七煎までも味わえず心残りにございました。(普通は三煎程度だそうですが、茶葉によりもつと味わえるとか

…編集子注)

ただ終始お一人であられ、食事もお手洗いもままならなかったのでは…。誠実に澄んだひとみでずっと静かにお一人一人に温かい眼差しを添えながらの一煎一煎であったため、お疲れになったことでしょう。大切なお仕事にご迷惑をおかけしたのでは…と心配がよぎりつつも、大変贅沢なひとときにございました。

時折、何処からともなく聴こえる龍笛の音、これは表千家の亭主を勤められたAさんとのことでした。

後から耳にすること多々ありで、熱い涙を落とすばかりにございます。

午後の席では、柳本先生が台湾茶のお席近くの少し広めの庭にて一人二役の狂言を

披露してくださり、玉砂利の中での足の運びなど難しいことを爽やかにさらりと演じられる御誠実さも胸迫る思いにございました。

皆様 本当にただ今日一日のお席のためにどれほどの労力と影の働きがあったことかと、それが容易に忍ばれ、感無量という簡単な言葉では表すことのできない一日でございました。

一日限りの不二の野点茶会にございます。夢幻の世界、親しくお世話になった方々にお声かけして楽しんでいただきましたかったという思いもよぎりましたが、私はこの度は招かれる側の身でもあり、またお声かけすれば祝儀の気遣いもさせてしまい、お宿や交通費など何かと物入りさせてしまうことも想像に難くなく、ぐっと我慢のいることにございました。さりながら、各流派いずこの席もお水を吟味し、湯を沸かし足し添え、足し添え、こなれた柔らかい湯相にて、一服の抹茶、お濃茶もお薄も実に美

味しゅうございました。

そして何よりも、御参加の皆さんが心から楽しんでおられ、終始笑みをたたえ輝いておられました。不二の夢幻の茶会、余情深く感じました。

時に流派のあることを煩わしく思うこともありますが、こうして皆さんが思い思いに楽しんでおられる姿を見せていただくと、それぞれの流派が成り立ってきた背景と茶の湯の歴史の意味深さに想いを寄せた一日でもありました。

私の傘寿のための趣向というより、これはもう、私にとっては生前葬にございました。段取りと片付けの繰り返し、車に荷を積んで、地球を何周したことでしょう。

出仕事屋として四十年、千回をゆうに越えた茶事屋も今日一日の皆様のぎゅつと詰まった真心の中で優雅に遊ばせていただきました。このような贅沢は誠に不二にて御準備くださった皆様、お一人お一人を心から誇りに思います。

これは私の力の及ぶところではなく、類が類を呼んで楽園を生むが如き結晶にございます。分が過ぎ、冥利に尽きる一日にございました。

先ずは紙面にて、取り急ぎ深謝申し上げます。

そしてこの度、白龍園にて快く炭を使わせていただくことをお許しくださった白龍園（株式会社青野）社長の青野雅行様により感謝申し上げます。

合掌

令和五年六月十七日

鶴の茶寮亭主

半澤鶴子

追伸 野点六月四日 ロスという言葉

がちらほらと耳に入ってきております。梅雨のさなか、どうぞお疲れがでませんよう。どなた様もくれぐれもご自愛くださいませようお祈り申し上げます。

「これほど愛に満ちあふれたお茶会を私はかつて味わったことがない」

「ことがない」

御参加くださった方のつぶやかれた言葉の一つです。記念に記しておきます。

何の茶会と問う人ありて答えけり

極楽浄土の催しですと

わが傘寿 祝いくるる茶会を巡りつつ

生前葬の終えしこちちす

親を見ず 生きながらえて八十路

ここ白龍園の山に鶴舞う

一服を呑みほすごとくに心あつく

苔の上にも涙おとす

けふ一日野点に憩ふともがらに

幸多かれと未来を託す

六月四日の余情残詠 五首